「再話」の試み『シャーロック・ホームズ：バスカヴィル家の犬』

05L027　加藤　春香

はじめに

アーサー・コナン・ドイル（Arthur Conan Doyle 1859−1939）による名探偵シャーロック・ホームズの冒険では、この探偵による難解な事件解決までの過程が、彼の親友であるワトソン博士の視点から語られる。このレポートでは、ワトソン博士以外の登場人物から見た、事件の一部の語りなおし（再話）を試みた。ここで筆者は、正統な遺産相続者を殺害し、莫大な遺産を手に入れようとするステイプルトンと名乗る男の妻ベリルの手記という形で、事件の過程を語りなおしている。実は、ステイプルトンはバスカヴィル家の血を引くものの一人であったが、他にも罪を犯していたため、偽名を使い、莫大な遺産を手に入れるチャンスをうかがっていたのだ。冒頭と結部、またところどころに「手記」そのものが「語り手」として介入している部分は、理解しにくいかもしれないが、筆者が複雑な「語り」の構造に挑戦したものと評価する。また、当時の既婚女性の立場の弱さを踏まえて、妻の視点から平凡な市民を装った犯人の残虐な面を描写している点、また事件の舞台となるイギリス、デボンシャーの荒地（ムア）や沼地をこの女性の心象風景として用いている点は、筆者の原作に対する理解の深さを示していると考える。

（レポート指導教員　杉村使乃）

ベリルの手記

黒く冷たいムアの底なし沼の泥が、わたしの体を包んでいくのを感じた。泥がまわりに纏わりついて、強風が吹いているのにちっとも動くことは出来なかった。

少し先の方を見ると、わたしをこの場所に投げた女性が見えた。慣れた手つきで道しるべの棒を抜きながら、遠くへ去っていく。

強風の中、歩くその女性は、風でその黒い髪の毛が乱れているのを気にしている様子もない。
彼女がわたしに残した、物語を思い出した。

泥で思い出せない部分もあるけれど、彼女の最後の気持ちはしっかりと残っている。半分以上、底なし沼の中に沈んでいるわたしは、ゆっくりと、沈みきるまで、それを思い出してみることにした。

○○月○○日　午前

ジャックが目の色を変えて、採取用の網を持ってムアに出て行った。きっと、昨日到着したサー・ヘンリーに接触するためだろう。ジャックに見つからないように作った手紙も効果はなかったようだ。いつの間にか口からは溜息しか出ない。

私がしたことの無意味さを示すように、昨日の夜、サー・ヘンリーがバスカヴィルの館に到着したとの連絡が入った。その知らせを聞いたジャックはにこやかな、表の笑顔を覗かせて「明日、ご挨拶に行かなければいけないな、ベリル。」と私に語りかけてきた。

最初に彼と出会ったときは、その笑顔が良いなんて考えていたものだけれど、今となっては、それはただの仮面だと気づいている。声を押し殺して「そうね。」と答えるのが精一杯だった。

知らせを届けたアントニーが部屋を出て行くドアの音を聞いて、ジャックはゆっくりと私の座っている椅子に近づいてきた。

「ベリル、お前がロンドンでサー・ヘンリーに送った手紙のことは知っているぞ。」

「何のことです？」

私の言葉と同時に、無骨な掌が私の髪の毛をつかんで無理やり顔を向けさせる。

「わかっているだろう？俺の言いたいことが。お前は俺の妹だ。」

搾り出すような声で答えることしかそのときはできなかった。私の反応が面白くなかったのか、ジャックはその後、私の頬を数回叩いて寝室へ戻った。

今、右手にはペンを持ち、これを書いている。左手を、昨夜叩かれた頬に添えて、窓の外の景色を見る。ムアの景色が広がっていた。

これから私が行うことを考えると、ただ神に祈る気持ちになった。どうか夫に気づかれませんように。そして、これから夫が行うであろう行いを阻止することが出来ますように。

○○月○○日　夜

やはり私がしていることは無意味なことなのだろうか。今日の午後の大きな過ちを思い出す。

ジャックを追って、ムアに出てみると、夫はすでにサー・ヘンリーと出会うことが出来たようだった。昨夜の張り付いた笑顔をサー・ヘンリーに向けて、何かを喋っている。きっと、私たちのことやムアのこと、そしてあの一族の魔犬伝説を話しているのだろう。

このムアに移り住んでからの二年間、私はある一つの核心にたどり着いた。確かに夫のジャックは昆虫学ではそれなりの評価をもらっている。だからこそ、このムアに移り住むことは誰が見ても疑問に思わなかった。しかし、ジャックの目的はそれではなかったのだ。

ムアに移り住んでから、一週目にサー・チャールズのもとに挨拶をしに行った。このときまで、私は夫を信頼し、疑問も持たずに愛していたと思う。その私の心を不安と疑惑が支配したのは、サー・チャールズに誘われて食事をしているときだった。一瞬、夫の目が豪勢な食事には向けられず、ある一点の肖像画に向けられた。

「どうかいたしましたかな？ミスター・ステイプルトン。」

それにサー・チャールズは気づき、声をかけた。

「…いや、バスカヴィル家の代々の肖像画が素晴らしく、ついつい見惚れてしまいました。」

顔にはいつもの笑顔を貼り付け、サー・チャールズと話すジャックの目は、今までに見たことのない、炎が宿っていた。サー・チャールズと会話をしている間もちらちらとその肖像画をまるで舐めるように、そして確信したように見ていた。私は夫のその今まで見せたことのない不可思議な態度に疑問を持った。館を去るときに、その肖像画のことを思い出し、私ももう一度、その肖像画を見た。一瞬、自分が息を呑むのがわかった。私たち二人が目に留まったその肖像画は、バスカヴィル家の魔犬伝説の元凶、ヒューゴー、その人の肖像画であった。一見、ジャックの肖像画だと勘違いをした。

メリピット荘への帰り道、私の心臓は破裂しそうなくらい激しい鼓動を繰り返していた。隣のジャックはというと、目にはあの炎を宿らせて、何かを呟いていた。私はこのときに心に湧いた不安が、数年後に実現

されるとは夢にも思わなかった。
一見魔犬伝説を模しての事件だった。けれど、ジャックが私にも見せないことを計画にうつしたのだ。夫、ジャックはバスカヴィル家の人間だったのだ。そして、サー・チャールズを殺害した。

思い出してみれば、サー・チャールズにも、魔犬伝説をしつこく聞いていた。そして、今、目の前には、サー・ヘンリーにも魔犬伝説をしつこく聞き、ジャックが知っていることをしつこく聞かせているに違いない。そうして、彼らに「恐怖」を根底に植え付けているのだろう。
まるで自慢話をしているようにジャックは話し続けていた。すると、手に持っていた網を振りかざし、底なし沼の方へかけて行った。きっと何かの昆虫を追いかけていったのだ。ロンドンでの手紙に効果がなかったのならば、今が好機だ。
夫の姿が見えなくなって、サー・ヘンリーのもとに歩み寄った。彼も、私に気づいたのか、帽子を取り、口を開こうとしていた。
「お帰りください！このままロンドンにお帰りください、すぐに。」
初めて見るサー・ヘンリーは、バスカヴィル家の魔犬伝説には程遠いような雰囲気を纏っていた。知性があり、紳士の風貌はそのままだが、私の忠告にポカンと呆気に取られていた。
「どうして、帰らなくちゃならないんです？」とひとごとのような答えを返してきた。
「ご説明はできません。でも、お願いです。お帰りになって、二度とふたたびこのムアにいらっしゃらないで。」
「でも、来たばかりなんですが。」
まるで、どこ吹く風といった答えに、私の声も高くなった。
「ああ、どうして！ あなたのためを思って申し上げているのに、わかっていただけないのでしょうか？ ロンドンにお帰りくださいな！ 今夜にでも！ どんなことをしてでも、この場所から離れてください！」
まくし立てるように言い、息を吸うと同時に、ジャックがこちらに向かってくるのが見えた。
「いけない！ 兄がこちらに！ 今のお話、内緒にしてください。——あそこの、スギナモのなかに咲いているランを摘んでくださいません？ このムアにはランがたいそう見事に咲くんですよ、もう花の盛りにはちょっと遅うございますけれど。」
やはり、サー・ヘンリーには他人事のようなことだったのかもしれない。ジャックが私たちのもとに駆け寄って、「やあ、来ていたのか、ベリル！」と声をかけた。けれど、その声にはちっとも私をいたわるような響きはない。
「ええ、ジャック、暑そうだわね。」
私もいつものように返事をする。疑うように「どうやら、自己紹介はすんだんだな。」と言った。
「ええ。このムアの本当の美しさをご覧になるには少々遅すぎましたって、サー・ヘンリーに申し上げていたところよ。」
この私の言葉を聞いて、ジャックも、サー・ヘンリーも驚いた顔をして「えっ、どなたにだって？」と聞いてきた。
「てっきり、サー・ヘンリー・バスカヴィルと。」
間入れず、サー・ヘンリーと思わしき男性が口を開いた。
「いいえ、とんでもない。貴族の身分などではありませんが、友人なのです。医者で、ワトスンと申します。」
その言葉を聞き、私は、自分の大きな過ちにやっと気が付いた。
「とんちんかんなお話をしてしまいましたわ。」

顔に血が上るのを感じた。また私は失敗してしまったのだ。サー・ヘンリーに身の危険を知らせる手立てをいくつか行ったのに、ことごとく失敗に終わる。

その後、ワトスン先生は私たちが住むメリピット荘に来た。ジャックは少し話をして、彼にサー・ヘンリーと会う約束を取り付けた。ワトスン先生は、少しすると、「私もそろそろ友人の館に戻らなくては」と言って、私の方を気にかけながら早々と帰っていった。ジャックが今日の収穫をレポートにまとめている少しの間に私は、ワトスン先生への誤解を解くため、近道をして、彼を追いかけた。

息が荒くなり、右の脇腹が痛んだ。

どうやらワトスン先生より早く着くことができた。彼が私の姿をとらえる。

「待ち伏せしようとしてずっと走ってまいりましたの、ワトスン先生。帽子をかぶる暇もありませんでしたわ。ぐずぐずできません、私がいないことを兄に気づかれてしまいますから。一言、お詫びを申し上げたくて。あなたをサー・ヘンリーと間違えるなんて、馬鹿な思い違いをいたしましたこと、本当に失礼いたしました。私の言葉、どうぞお忘れくださいませ。あなたは何の役にも立たないことでございます。」

息を整えず、一気に言う。先ほどの、呆気にとられた表情ではなく、幾分か厳しい顔をワトスン先生はしていた。

「そうは言っても、忘れられませんよ、ミス・ステイプルトン。わたしはサー・ヘンリーの友人であり、あの方の身の上はひとごとではないのです。訳をお聞かせください。サー・ヘンリーがロンドンに帰られることをどうしてそんなに強く望まれるのかを。」

苦虫を踏み潰した顔をしていたに違いない。呼吸は、すでに落ち着いていた。

「気まぐれな女の台詞だったのです、ワトスン先生。私、訳もなく何かを言ったりしたりしてばかりいるんです。」

自分でも、辻褄の合わない話をしていると思った。けれど、ワトスン先生の声色が変わった。

「いいえ、まさか。あのとき、お声が震えていました。あなたの目の色も覚えていますよ。どうかお願いですから、ごまかさないでください、ミス・ステイプルトン。ここにやってきてからというもの、私はずっと影につきまとわれている気がするんです。グリンペン・マイヤーの底なし沼にいるような気分ですよ。そこらじゅうに青々とした草むらがあって、足をとられて沈むかもしれないのに、道しるべとなるものが何もない。どういうことをおっしゃりたかったのか教えてください。あなたがご警告くださったことは、きっとサー・ヘンリーにお伝えしますよ。」

きっとワトスン先生には、私の阻止しようとしていることがわかったのかもしれない。私の夫の仕業を気づいていなくても、私が何か絡んでいることは、彼の心の中で確信として存在しているのだろう。一瞬、彼に何もかも話して、協力してもらおうかとも考えた。けれど、夫の狡猾さと計画性には隙がない。ワトスン先生も犠牲になってはいけない。ぎりぎりのラインを保って、私の行いを知られるわけにはいかないのだ。

「――考えすぎていらっしゃいます、ワトスン先生。」

夫が、サー・チャールズを殺害したのは、明白だ。その証拠は、今だ掴めていない。

もう一度、私はワトスン先生の瞳を見た。そこには、私の言葉と、ムアの陰湿な雰囲気に対する疑惑の色が浮かんでいた。私の行いはまるで、夫が行った「恐怖」を根底に植えつけるように、私もワトスン先生に「疑惑」を植え付けてしまった。

家に帰ると、ジャックが私を待っていた。今日もまた、暴力に抵抗できずにいる。口からは嗚咽しか漏れず、また右の脇腹が痛んだ。

こんな夫でも、私は愛しているのだろうか。夫は、バスカヴィル家の遺産を狙っている。そのために、

サー・チャールズも、そしてサー・ヘンリーをも手にかけようと画策している。それがわかっているのに、私は何故助けを呼ばないのだろうか。ワトスン先生や他の人を危険にさらしたくないと言いながら、ワトスン先生に疑惑を植え付けた。周りに気づかれないように、殺害を阻止するように動いていることが、夫を愛していることにもなるのかもしれないと頭によぎっては消える。一度は、愛したジャックを、地獄に行かせたくないのかもしれない。けれど、私は薄々気づいていた。ムアの底なし沼につかまって足掻いていることを。

風はより強くなり、雨も降ってきた。すぐに沈んでしまうかと思ったが、まだまだ沈みそうにない。上質なわたしの紙はすでに泥水と雨で茶色く染まり、インクがにじみ始めていた。彼女の苦悩は、文字通り、わたしに染み付いている。ある晩の彼女の夫に殴られた鮮血も、涙も、今は茶色く染まっている。

わたしがみる限り、彼女は夫を途中まで愛していたのだろう。けれど、決定的に、変わったのは、この日である。

○○月△○日　夜

本物のサー・ヘンリーと出会って数日が経った。ワトスン先生はあの後、サー・ヘンリーに私の忠告を伝えたのだろう。彼らは私をちらちらと見ていた。

ジャックはワトスン先生と会った午後に、バスカヴィル家を訪れ、翌日にはサー・ヘンリーとワトスン先生をつれ、ヒューゴー伝説の地を案内していった。ジャックは、魔犬伝説を聞く素振りや、自分の知っていることを話し、やはり少なからず彼らに恐怖を与えているのだろう。それはまるで遅効性の毒のように。

その後、彼ら三人は、メリピット荘に昼食をとりにやってきた。私は、また、本物のサー・ヘンリーに忠告を言うチャンスを狙っていた。

「ベリル、こちらがサー・ヘンリー・バスカヴィルだ。」

ジャックが無機質な声で私をサー・ヘンリーに紹介する。その声を無視して、サー・ヘンリーを見て、こう言った。

「――ごきげんよう、サー・ヘンリー。妹のベリルですわ。兄からあなたのことを聞いて、早くお会いしたいと思っていましたの。」

初めて見たサー・ヘンリーは、堂々としてまっすぐ私の瞳を見て話す紳士だった。アメリカ訛りの癖も、どこか心地よい。彼からは故郷の風を感じた。

「――ベリル。」

ジャックの声ではっとした。彼の目が、また厳しいものになっていたのだ。

「すぐに昼食を用意いたしますわ。」

そう言って、夫のその目を避けた。

それから、サー・ヘンリーは私のところによく訪ねてきてくれた。彼に忠告を言うチャンスを伺っていたのに、ジャックは私たちを二人っきりにはしなかった。バスカヴィル家とメリピット荘を交互に行き来をしていた。

ある夜、ジャックはワインを一人で飲んでいた。私が見ているのに気づき、嫌な笑いを浮かべて、私のそばに近づいてきた。

「飲みすぎじゃないの、ジャック。」

嫌悪感をたっぷりと含んだ言葉が口から出た。
「やけに、サー・ヘンリーと仲良しじゃないか、ベリル。サー・ヘンリーもお前のことをいたく気に入っていると俺に喋ってくる。胸糞が悪くなるということはこういうことだ。お前は俺の妻なのにな。」
「…そうね…。」
こんな関係で夫婦だとこの男は思っていた。「妻」と口にした。
「サー・ヘンリーは“妹”だと思っているから、お前を狙っているんだな。愉快な話だ。神の御前で誓いあった“夫婦”なのに。お前をサー・ヘンリーに渡してたまるか。」
暴力を振るわれ、体は痣だらけだった。その関係が“夫婦”なのだろうか。これでも、私はこの男を愛しているのだろうか。
「…あなたでもサー・ヘンリーに嫉妬するのね。」
嫌な笑いがまた深くなっていった。
「それはそうだろう。俺は“夫”だからな。“妻”という道具を使う主なんだ。」
サー・チャールズを殺した犬の臭気がこの男から匂った。
この男に嫉妬され少しでも「愛されている」と思った私が馬鹿だったのだ。私を「道具」と言ったこの男になんの未練があったのだろう。
この夜から、私の愛はぷつりと切れた。

それから暫くして、サー・ヘンリーから二人っきりで散歩をしないかという手紙が来た。彼に直接危険だという好機だった。快く私は返事を出した。ジャックは怪しんでいる素振りをしていたが、何も言ってはこなかった。私を泳がせるつもりなのだろう。
その日の午前になり、待ち合わせをした丘に着くと、すぐにサー・ヘンリーの姿が小道の先から見えてきた。
「待たせてしまいましたかな？」
「いえ、私も今到着したところですわ。」
今日のムアは珍しく晴れ渡っていた。ゆっくりと、周りの景色を見ながら他愛のない話をする。時に、サー・ヘンリーは私を驚かせ、私も彼に答え、話をしたのだった。久しぶりの、楽しい時間を過ごした。その間も、いつ彼に忠告を言おうか考えあぐねていると、サー・ヘンリーは立ち止まり、私の腰に手を回してきた。
「ミス・ステイプルトン、私は」
彼の力強さに驚くと同時に、私の目に入ってきたのは、怒りの形相でこちらに向かってくるあの男の姿だった。
「サー・ヘンリー。おやめください！」
手を振りほどこうとしたのも、もう遅かった。私たちの体が離れた瞬間、ジャックが割って入ってきた。
「貴様っ俺の妹に何をしているんだ！！」
ジャックの表の顔しか見てこなかったサー・ヘンリーは驚きのあまり、一瞬たじろぎ、そして説明をしようとしたが、ジャックは聞き入れない。
「ミスター・ステイプルトン！あなたは私を侮辱しているのか！」
サー・ヘンリーも頭に血が上っている。
「ベリルッ行くぞ！」
ジャックの有無を言わさない口調に気おされしつつ、サー・ヘンリーを気にしながら、私たち二人はメリ

ピット荘へ帰った。
その後のことは、意識が朦朧としていて覚えていない。気づいたときにはもう夜で、口の中は血の味がした。体には新しい痣がいくつもできていた。これを書いている今も、その痣は癒えず、真新しい。
どうやら、その日の午後にはジャックはサー・ヘンリーに詫びに行ったらしい。私が気を失っている間に、体裁を整えに行ったのだ。そして、明日の金曜日に仲直りのしるしにメリピット荘で食事をするという約束をしていた。詫びに行き、帰ってきて意識を取り戻した私を見てジャックはただ右の脇腹に蹴りを一ついれ、書斎にこもった。
あの男は、明日、サー・ヘンリーの首をあの犬に噛ませる。そのための用意をしているのだろう。
やはり、私は、何もできず、このまま、見守っていることしかできないのだろうか。

○○月△△日　夜

何日か、日にちが空いてしまった。あの金曜日、多くの出来事があった。あの日は私があの男から解放されるための日だったのかもしれない。

その金曜の朝から、ジャックは私が身支度をしている部屋に入ってきた。
「ジャック、どうしたの？」
無言で、けれど、その顔には笑みが浮かんでいた。久しぶりに、この男の顔をしっかりと見たような気がした。こんなに酷く醜悪に歪んだ顔だったかと思った瞬間、髪の毛をつかまれ、鏡台の椅子から引きずり落とされた。間を入れず、右の脇腹に蹴りを入れられ、床にそのまま叩きつけられる。
それは今まで経験したどの暴力よりも強く、凶悪だった。そこから、私は、“今日”なのだと、感じた。
「ジャック！あなた、まさか…！」
その言葉を聞いて、醜悪な口から笑いがあがった。
「そうだよ、ベリル！今日だっ今日なんだ！」
この数日間、この男は、犬の元に通っていたのを思い出した。古いスズ坑跡に手を加え、隠れ家としているようだった。
「今日は、サー・ヘンリーがこのメリピット荘に来る！そして、俺がバスカヴィルを名乗る第一日目になるんだ！」
強烈な力で髪の毛を引っ張られ、とうとう体ごと倒れた。そのまま、この男は自分の書斎に私を引きずっていった。その部屋は昆虫の標本が並べられ、薄暗い部屋だった。
その部屋の真ん中に大きな柱に私を叩きつける。強い衝撃に、息が一瞬とまる。一緒に持ってきたシーツと縄でその柱に私をくくりつけた。
「何を…！」
身動きの取れなくなった私は、せめて縄が緩むように、ジャックに抵抗するように身を乗り出し、抜け出そうとした。それを見たジャックは、さるぐつわのためのタオルを口にではなく、喉に巻きつけ、締め付けてきた。
首が絞まり、意識が首に集中する。
「お前はまたあとで、俺の可愛い犬にくれてやる。それまで、ここで寝ているんだな。」
とうとう“道具”を始末するときが来たのだと、私は悟った。酸素が少なくなり、目の前の、夫だった極悪人の顔が薄れてきた。ここまできて、改めて私は思ってしまった。この男にとって、最初から私はただの

“道具”であったと。私は利用されたのだと。そう思うと、私の愚かさとこの男を「愛した」事実がさらに私に追い討ちをかけてきた。私の、この男のやろうとしていることを阻止しようとした行いこそが、伝説の魔犬の呪いのようなものだったのかもしれない。呪いに縛られ、結局、その牙に私は今かかっているのだ。

ジャックの歪んだ笑みが、そのとき見た私の最後の記憶だった。

扉が壊れるような音がメリピット荘全体に響いて、私は気が付いた。唯一部屋の中にある窓を見るともうすでに外は冥界の景色のような暗さが広がっていた。そして霧があたりを包んでいた。

私の体は、朝と同じようにシーツと縄で柱に巻きつけられていた。そして朝と違うのは、喉を絞めたタオルは柱に巻きつけられ、口から鼻にかけてもまたタオルで巻きつけられていた。新たにさるぐつわをされたのか、口からはくぐもった声しか出ない。悔しさがこみ上げてきて私は強くタオルを噛んだ。

「――くそっ！ やられた！ホームズめっ！」

階下から、ジャックの怒鳴り声が聞こえた。どうやら、計画は失敗したらしい。

大きな足音がこの部屋に近づいてくる。そして、足で扉を蹴破るようにしてジャックは入ってきた。私と目が合い、また歪な笑みを浮かべた。

「よぉ、ベリル。気分はどうだ？」

それは、今までに見たことのない、風貌だった。体臭は、以前嗅いだことのあるあの犬の体臭で、髪の毛は乱れ、シャツのカフスはその汗とムアの泥で汚れ、第三ボタンまでだらしなくあけていた。急いで走ってきたのか、呼吸は乱れ、嫌な音しか聞こえてこない。

「やはり、殺しておくべきだったな、ベリル。お前も、ワストンも、モーティマーも！ あいつらを生かしておくべきではなかった！」

相当慌てているのか、舌がもつれ合っていて、それ以上聞き取れはしなかった。部屋にある毛布や着替え、そして財産になるようなものを一通り鞄に詰め、一目散に出て行く男の姿を見て、もう私は何も感じなかった。

しばらくして、今度は数人の足音が聞こえた。たくさんある部屋のドアを開けている様子だった。助けが来たのだと思い、さるぐつわをされている口から、精一杯の声を上げる。やはりくぐもった声しか出ない。

身動きがほとんどとれないけれど、懸命に動き、音を立てた。

「中にだれかいる！ 人の気配がするぞ。開けろ！」

数人の男が、ドアを蹴破って、手にはピストルを構えていた。そこには、ワトスン先生、見知らぬ男性、そして彼らを先導しているのがきっとシャーロック・ホームズなのだろう。彼らはこの部屋の異様な光景に最初は驚いていたが、私を見つけ、すぐに駆け寄ってシーツを解いてくれた。シーツが緩められ、解かれていく。それがまるで、私の呪いを解いてくれるもののようで、解けると同時に私は、床に落ちた。

「――― …ド君、ブランデーだ！ …失ってしまったよ。」

ブランデーの強いアルコールが喉を通って、体が熱くなった。目を開けると、彼らが心配そうな顔をしていた。ブランデーにむせるのもかまわず、私は聞く。

「無事ですか？ 逃げ切れましたか？」

「逃げ切れるものではありませんよ。」

「いいえ、いいえ、私の夫のことではありません。サー・ヘンリーは？ あの方はご無事でしょうか？」

「ええ。」

一息をつく間もなく、サー・ヘンリーを見て、また矢継ぎ早に質問をする。

「犬は？」

「死にました。」
　その一言を聞いて、全身の力が抜けて、いつの間にか私は溜息をついていた。
　そして何かの栓が取れたように、私は言う。
「ああ、よかった！ よかったわ！ ああ、なんて酷い人！ あの人がどんなことをしたか、ごらんください！」
　私をシーツから解くときに首を見られたかもしれないが、もっと証拠を見せるように私は袖を捲り上げた。新しい痣も古い痣も、私の体に残っている。背中も、足も、胸も腹も、全身にあの男の証拠が残っているのだ。
　私のその痣を見て、彼らが息を呑むのがわかった。
「でも、こんなことはなんでもないのです！ ——何でも！あの人に本当に痛めつけられ踏みにじられたのは、私の心です。いじめられようと寂しかろうと、嘘の生活だろうと、どんなことにでも耐えられたでしょうに——愛されているという希望にしがみついていられさえすれば。でも、それすらも偽りでした。私は、騙されて、道具として使われていただけなのです。」
　そう。あの夜から、私の「愛」はぷつりと切れ、あの男から愛されているということもなくなったのだ。恋は盲目とはよく言ったものだ。愛にすがりつくただの女だったのだ。それが間違っていたと気づいたあの日から、“道具”として扱われていたのだと身にしみて理解してしまった。私が足掻いていたこともあの男の計画の一部だったのだろう。私はあの男にとって“道具”だったのだから。
　そして、私は頬が濡れているのに気が付いた。いつの間にか頬には涙の線がいくつもできていて、とめどなく流れていった。
「もう、あの男に対する好意はまったくありませんね。」と聞かれた。涙が止まらない瞳で見て、うなずく。
「では、あの男の居所を教えてくださいませんか？ 悪事に手を貸してしまったというのなら、償いとして、今度はぼくたちにお力を貸してください。」
「逃げていくとしたら、あそこしかありません。グリンペン・マイヤーの底なし沼の真ん中の島に、古いスズ坑跡があるんです。あそこで犬を飼い、隠れ家としても手を入れていましたから。あそこに逃げたはずです。」
　私のその言葉を聞いて、質問してきた彼がランプを窓にかざした。
「ごらんなさい。今夜、グリンペン・マイヤーに足を踏み入れるのは無理ですよ。」
　そう、あの男がこの部屋に入ってきたとき窓から見た霧はより濃くなっていた。そしてすぐにこの考えにたどり着く。
「そう。たとえ入れたとしても、出てはこられないでしょうね。」
　私とあの男は暇を見つけてはムアへ出て行き、道しるべの棒をさしていた。この霧ではあの棒は見えない。
「こんな夜に道しるべの棒をどうやって見つけるというの？ 棒を植えて目印にしてあるんです。あの男と私の手で植えたものです。いっそ、抜き取ってやりたい！そうしたら、あの男は袋のネズミだわ。」
　私の笑い声がメリピット荘に響いた。やっと、あの男から逃れられた！ 私の大きな過ちは、あの男と出会ったことだ！ 私が今まで耐え忍んできたことを思うと、その日の霧は甘い綿菓子のようだった。
　そして、私の目の前は、暗く沈んでいった。

　そうして、今日の午後、シャーロック・ホームズの最後の訪問があった。あの日の翌朝、霧が晴れてから、私の案内で底なし沼まで行ったが、あの男の足跡は一旦消えた。途中まではあったが、あの夜の霧の中、沼の底に行ったのだろう。事件は、私の知らないところで動き、解決したのだった。

最後の訪問の、彼が帰るときに、彼はこう言った。
「あの男は、私を最後まで苦しめました。あなたは、もう自由なのです。」
やっと、最後の肩の荷が下りて、私は言う。
「ええ、そうですわね。今までのことは忘れて、新しい人生をこれから歩んでいきますわ。」

私は明日、底なし沼にこれを捨てにいこうと思う。今までの人生と決別するためだ。今読み返してみると、これまであの男と過ごした日々は、あの男の手が私の足をつかみ、ムアの底なし沼の底まで引きずりこもうとしていた日々だったのだ。
このメリピット荘を離れ、私は――――――

とうとうわたしは、全身が泥に包まれた。冷たい泥が、彼女の文字をにじませ、消していく。
彼女がわたしをこの底なし沼に投げたとき、わたしは彼女の表情を見た。晴れ晴れとして、このムアには似合わない表情だった。強風の中、なびくドレスの裾が、印象的だった。
この彼女の気持ちを持って、わたしは底なし沼に沈んでいく。この沼の底には、あの男がいるのだろうか。足にこびりつく泥は、悪意を持った手のようだと、誰かが揶揄していた。今のわたしには確かめる術がない。
彼女の未来は、明るいものだろう。けれど、これまでのことを考えると、確かにそうなのだろうか？あの男の悪意がまだ彼女にまとわりついているのではないかと、ただのわたしは考えてしまった。
最後にそう考え、沈み行くわたしが聞いた最後の音は、雨の音と、彼女の悲鳴だった。

引用作品

ドイル、アーサー・コナン　日暮雅通訳　『新訳シャーロック・ホームズ全集：バスカヴィル家の犬』　光文社　2007年。